へ分散したと考えられる．南半球での本属の分散は3方向へ生じた．1．南大西洋の海洋堆，海嶺にそって，2．ケルゲーレン島（太平洋—南極海隆起にそって），3．南極大陸及びその近接海域の陸棚にそって．特に，3の分散では南極域の氷は現在の1.5倍あり，南極大陸沿岸は完全に氷で覆われ，沿岸の陸棚がほとんどない状態であった．このため沿岸性の魚類の著しい減少を起こさせたに違いない．そして沿岸性魚類のいくつかはより深い陸棚の斜面へ追いやられ，その結果，陸棚の種の生息域の水深が広がった．そこで本属の著しい種的分化を起こさせた．著者はこの海域が本属の第2の分散のセンターと考えている．

ここまで本書の概略を説明して来たが，全体として，本書の中心はやはり分類と記載である．日本近海から本属の魚類は7種知られているが，全く共通種がいない．しかし属及び種の詳しい記載は数少ない南半球の魚類の分類に関するテキストとして，また，あまり研究の進んでいなかった魚類群のモノグラフとして非常に有益な書物である．原記載を含め，彼の論文のほとんどはロシヤ語であるので，英語で書かれたこの本はロシヤ語を読めない者にとって大変有り難い．また，総説では形態と地理的分布から本属魚類の起源と分散について著者の考えを示したものである．著者が専門とし最も興味を持って手掛けてきた分野だけに説得力があるが，本属魚類だけでなく，南極の魚類の分散と進化について問題は将来多くの論議を呼び起こすものと思われる．

最後に，本シリーズはタイプライターで打った原稿を直接印刷したものである．このことは行の右端が揃っていないことで一目瞭然である．分類関係の論文は量が多く，すべてを一度に投稿できる雑誌は非常に少ない現状にある．この方法はこの問題の解決に有効であるかもしれない．本シリーズは，以前我が国で出版されていたFauna Japonica シリーズを思い出させる．

（尼岡邦夫 Kunio Amaoka）

会員通信・News and comments

第3回魚類分類談話会のこと
Third Seminar for Systematic Ichthyology in Maizuru, Nov. 1–3, 1986

舞鶴の京大農学部附属水産実験所での魚類分類談話会も3回目を迎え，無事に終えることができましたので，その内容について簡単に紹介しておきます．

日程は1986年11月1日の午後9時から夕食談話会，2日午前9時から午後6時まで研究発表会，午後6時30分から懇親会，3日午前9時から標本観察会と例年通りで，参加者は35名でした．今回は特にテーマを設定せずに研究発表会を行ないました．以下にそのプログラムと内容について記します．

1. 日本産カズナギ属魚類について．佐藤　淳（三重大・水）
2. ハナダイ亜科 *Lepidoperca* 属魚類の分類学的再検討．藍沢正宏（東大・総資）
3. 南米産ナマズ類の一種 *Aspidoras fuscoguttatus* の初期発生．浦野貴士（東大附高）
4. 能登半島に出現するイスズミ属魚類について．坂井恵一（のとじま水族館）
5. オオメハタ属魚類の分類学的再検討．望月賢二（東大・総資）
6. ヒマラヤの渓流魚 *Schizothorax* 属魚類の形態について．寺島　彰（京大・理）
7. ウバウオ類の骨格について．林　公義（横須賀市博物館）
8. 知多半島第3系からの深海魚類群集．大江文雄（愛知教育大）
9. 河川産・湖産アユ稚仔の相対成長とそれに関連した骨格形成の差異．伊藤淳雄（東海大・海洋）・望月賢二（東大・総資）
10. 魚類における成長，再生産および死亡間の関係に対する制御理論手法の応用の可能性．北原　武（京大・農）
11. 日本産中新世ニシン科魚類 *Eosardinella hishinaiensis* の系統類縁関係．佐藤陽一（都立大・理）
12. 外部形態研究の復権（予報）．中村　泉（京大・水実）
13. 総合討論

佐藤氏は昨年のカズナギ属の発表（木村氏による）にさらに1未記載種を加え，斑紋等の比較，地理的分布についての報告で，各種の地理的分布が一部を除いてほとんど重ならないことに議論があった．藍沢氏は南アフリカ，オーストラリア・ニュージーランドに分布する *Lepidoperca* 属に2未記載種を加えて，それぞれの形態と分布の報告であった．浦野氏は南米産ナマズ類の一種の発生過程をおって骨格等の形態変化を示された．坂井氏は能登半島の能登島で採集されたイスズミ類に3タイプあるとし，それらのうち2タイプはイスズミとテンジ

クイサギに同定できるが残る1タイプはどれにも同定できないことを示された．望月氏はこれまで日本近海，オーストラリア・インドネシア海域に分布し3種とされてきたオオメハタ属魚類が，歯骨，臀鰭第1担鰭骨等の比較から8種に分類できることを示された．寺島氏はコイ科の *Schizothorax* 属の口の形態には2タイプがあり，それらの極端なものを比較すれば別属にするほど異なっているが，同属の全種を比較すれば，相違の程度が片方からもう片方へ漸次段階的に異なっており，この属を2属に分けるのは妥当ではないとされた．林氏は日本産ウバウオ類の各種の骨格を比較検討され，それぞれの簡単な類縁関係を示された．大江氏は愛知県知多郡知多町の第3系中新統師崎層群山海累層（1,600 万年前）から採集された魚類や甲殻類，軟体動物，棘皮動物の化石写真を示され，また現世のマサバに近いサバ類の一種の化石を持参された．これらの化石生物は現在では水深200 m 以深に生息しているものがほとんどで，この化石群集の成因について議論があった．伊藤・望月氏は長良川と琵琶湖産の親魚から得られたアユ仔魚をほぼ同一条件で飼育し，両者の相対成長と骨格形成を比較した結果を示された．北原氏は人間による漁獲を最大の捕食者とみなし，その圧力によって魚種は純再生産率を最大にするようにその生活史特性を変化させて対応するという仮説から，現実に漁獲圧力を受けている魚種の状態を説明された．佐藤氏は中新世のニシン科の一種を現世のものと比較し，分岐分類学的手法でそれらの系統類縁関係を論じ，それが現世のマイワシ属に近縁であることを推定された．中村は昨今の魚類分類学では内部形態，染色体，蛋白質や酵素等による遺伝的変異の分析を重視するが，生活様式等に密着した外部形態の比較研究も軽視すべきではないことを述べた．

分類学というものを広義に解釈すれば，生物の種の研究であり，種は形態からのみ把握されうるものではなく，生態という側面もあわせもつ．そして，それらの性質には柔軟性がある．このように考えると，今後，水研・水試・栽培漁業センター・水族館等の現場で魚類の研究を行なっている人たちがもっと参加して下さり，自分の眼でみた魚に対する考えを持って議論に加わって下さることを望みます．このような人たちには，当然，いわゆる分類学をやっている人たちに対して質問や注文があるはずです．そういう交流をこの会で行なっていきたいと思っています．

次回は研究発表会を1日半にしてはどうか，という御意見もありました．検討してみたいと思います．また魚類研究に関するテクニック等の発表もして欲しいという声もありました．よろしくおねがいします．この会に関するお問い合わせは中村　泉（〒625 舞鶴市長浜　京都大学農学部附属水産実験所 Tel. 0773-62-5512）か中坊徹次（〒606 京都市左京区北白川追分町　京都大学農学部水産学科）にお願いいたします．

（中坊徹次 Tetsuji Nakabo・
中村　泉 Izumi Nakamura）

On Two Unique Reports of Species of *Liparis* in Alaska and Adjacent Waters

Species of the genus *Liparis* have often been found difficult to identify because of the confused state of the taxonomy of the genus and the poor condition that many specimens arrive in when they come in from the field. Many reports of species have in the past been shown to be misidentifications.

Able and McAllister (1980) clarified the status of *L. tunicatus* and extended its range from the western North Atlantic to St. Mathews Is., Ak. in the Bering Sea. They listed several earlier citings of *L. liparis* as synonyms of *L. tunicatus*. Mueller (1977) recorded from the Colville River region, Ak. in the Beaufort Sea a specimen of *L. liparis*. In fact this is a specimen of *L. tunicatus*. *L. liparis* is considered a species confined to the eastern North Atlantic regions.

Another problem specimen is that of *L. tunicatus* reported from Bering Is., USSR by Bean and Bean (1896). This specimen (USNM 38975) was reidentified by Burke (1912) as *Polypera greeni*. Examination of a radiograph of this specimen confirms that it is a *Polypera* sp. though the species identification could not be verified. Until the relationship between *L. tunicatus* and *L. bristolense* is clarified, St. Mathews Is. should for the present time be considered the southern extent of this species in the Bering Sea.

Literature cited

Able, K. W. and D. E. McAllister. 1980. A revision of the snailfish genus *Liparis* from Arctic Canada. Can. Bull. Fish. Aqu. Sci., 208: 1-52.

Bean, T. H. and B. A. Bean. 1896. Fishes collected at Bering and Copper Islands by N. A. Grebnitski and L. Stejneger. Proc. U.S. Natn. Mus., 19: 237-254.

Burke, C. V. 1912. A taxonomic study of the Cyclogasteridae. Ph. D. Dissertation, Stanford University.

Mueller, G. J. 1977. Species analysis of Oliktok-Colville Project. Inst. Marine Science Univ. Ak. Fairbanks 61-A-19-27 unpublished memo August 1970. *In* W. E. Pfeifer. Annotated bibliography of the fishes of the Beaufort Sea and adjacent regions. Biol. Pap. Univ. Alaska, (17): 1-76.

(Kenneth D. Vogt)

会　記・Proceedings

昭和 61 年度第 7 回役員会

昭和 62 年2月5日（木），於東京水産大学．出席者：岩井，阿部，新井，石山，黒沼，多紀，谷内，富永，松浦，沖山，丸山，望月．

議事：1．報告事項．2．本誌バックナンバーの在庫について検討し，在庫のない Vol. 31(1)-32(3) を増刷することを決めた．3．決算および予算について検討した．4．年会の準備状況について検討した．5．その他．

昭和 61 年度第 8 回役員会

昭和 62 年 3 月 12 日（木），於東京水産大学．出席者：岩井，上野，阿部，新井，石山，多紀，谷内，藤田，松浦，佐藤，丸山，望月．

議事：1．前回，前前回の記録の確認．2．報告事項．3．決算・予算について検討し案を作成した．4．著者負担印刷代の未納者について検討した．5．規約等の改正のための検討委員会を作ることを決定した．6．年会の準備状況について検討した．7．会費滞納者の取り扱いについての案を検討し，下記の通り決定し，評議員会に諮ることとした．8．その他．

「会費滞納者に関する取り扱い（案）」

1. 前年度の会費滞納があるものに対しては，その年度の会誌の発送を1号から停止する．ただし会費の納入があったときはまとめて発送する．
2. 滞納者に対する請求は，従来どおり年3回行う．
3. 会誌の発送停止から1年以内に会費の納入がないときには，退会したものとして処置する．
   この退会処置は，原則として発送停止が1年を経過したときに行われる評議員会に名簿を提出し，承認を得た後に行う．

昭和 62 年度年会

昭和 62 年度年会が，昭和 62 年 3 月 31 日(火)—4 月 1 日（水）に，国立科学博物館本館に於て開催され，以下の会合が行われた．

1．評議員会

3 月 31 日，11:35-12:25．31 名の評議員と2名のオブザーバーが出席し，名越誠氏を議長に選出した後，以下の議題で開催された．1．会長挨拶．2．昭和 61 年度会務報告．3．昭和61年度決算報告，同監査報告．4．昭和 61 年度編集委員会報告．5．役員人事に関する提案．6．昭和 62 年度予算(案)．7．会費滞納者に関する報告，及びその取り扱いについての提案．8．第 2 回太平洋・インド洋の魚類に関する国際研究会議組織委員会報告．9．その他．

以上のうち，会費滞納者の取り扱いについての提案は，会記の昭和 61 年度第8回役員会の項にある案のとおり承認された．また，会計幹事であった高木和徳氏が谷内透氏と交代すること，及び編集幹事の隆島史夫氏が退任することが承認された．規約等に関する検討のための委員会を作り，昭和 63 年度年会までに案を作ることが承認された．さらに，国際魚類研究会議組織委員会を解散し，国際魚類研究会議事務処理委員会を発足することが承認され，同委員会規定も承認された．その他の議案はすべて承認された．

2．総　会

3 月 31 日，13:00-13:35．約 50 名出席．林公義氏を議長に選出した後，以下の議題で行われた．1．会長挨拶．2．昭和 61 年度会務報告．3．昭和 61 年度決算報告，同監査報告．4．昭和 61 年度編集委員会報告．5．役員人事に関する提案．6．昭和 62 年度予算．7．会費滞納者に関する報告，及びその取り扱いについて．8．第 2 回太平洋・インド洋の魚類に関する国際研究会議組織委員会報告．9．その他．

3．研究発表会

3 月 31 日 9:00-11:30，13:30-17:00，4 月 1 日 9:00-12:00，13:30-17:00．第 1 会場，第 2 会場，展示発表会場に分かれ，下記の 78 題の研究発表が行われた．参加者は3月 31 日約 210 名，4 月1日約 180 名であった．